

# 平家物語の一試論

——平重盛を中心に——

## I

『平家物語』が、治承・寿永の変革期を見事に文学的に定着させたことは、今日の『平家』論者の中で、意見の一致をみるところである。

『平家物語』の作者が、貴族の側に属しながら、時代の動向に背を向けず歴史のよつて来るところを客観的な立場に立つて、たじろがずに擬視し、古代から中世にかけての内乱を、諸事件・諸人物を通して平家の没落に焦点をおきつつ、歴史の前進に参画する大小さまざまな人間像を造型したことも異論のないところだ。『平家』の作者が、古代貴族の側に立つ人間であるがゆえに、平氏の没落を単に平氏の没落とみずに、その没落を自分をも含めての、古代貴族全体の階級的没落と見、そこに平氏の没落を通じて、なみなみならぬ同情と共感と悲哀を、感じたであろうことは、『平家』の作者が信濃前司註①行長と言う古代

堀竹忠晃

貴族であることからも、想像に難くはない。同時に、平氏を滅亡に追いやつたもの、義仲や義経などの英雄とそれを取りまく群少英雄の東国武士団に対しては、平氏の没落を直接に導く契機をつくりその原因をなすものでありながら、それを悪人だとか、悪行だとか、平氏に敵対し憎むべき者として造型していない。むしろ彼等の平氏追討が見事であればあるほど、それがまさに英雄的な行為に恥じないならば、それだけ余計に、彼等の行動をダイナミックに、より一層の英雄像を造型させてゆき、それに同感と讃嘆の気持を倍加させてゆくのである。このことは確かに矛盾と云えば矛盾である。この様な態度については、永積安明氏が既に問題にされ、それを論究されている。

平家作者は、あれほどなみなみならぬ同情を示した平家一門をほろぼす敵対者であつたにもかかわらず、義仲の進軍に対しても、またきわめて同感的に彼によりそつて描き出しており、むしろ義仲が平家を撃破すればするほど、いよいよ巨大な英雄

像として造型するのである。このように、ほとんど矛盾するよ  
うな造型あるいは構造は、何にもとづくのであろうか。<sup>註②</sup>  
そしてこのような作者の態度に対して、氏は次のように述べ  
ておられる。

つまり一方では没落する平家に同情の涙をそそぎ、その悲  
哀を内面的かつ全面的にすくいあげ、他方ではそのような平  
家の没落を強力に押し進めるもの、つまり平家一族と矛盾、  
対立の關係に立つ義仲の行動を、同時に、平家一門にも劣ら  
ぬ同感をもつて英雄的巨像にまで完成しえたのは、原説話や  
原語りの担い手の相違にもとづく質の差によるだけではなく、  
むしろこの二つのものを同時に展望しうる眼が、平家作者の  
ものとして生まれてきたからにほかならない。<sup>註③</sup>

そしてこの平家作者の眼は「無常觀の自覚をとおして、否定  
的契機の確認に媒介されつつ、逆に積極的な現実への洞察・接  
近を可能にした」眼であり、そして平家作者の主体の確立を待  
つて、始めて可能であるとするのであるが、このことは言葉を  
換えて言うなら、平家作者は、中世の変革期の歴史的法則を主  
体のうちに体现していたことを意味するのであろう。

確かに『平家物語』は、単純に無常觀の文学だとか、悲哀の  
文学だとか、歴史の否定的側面の強調だけに左右されるところ  
のものではなく、積極的な中世の変革期の歴史の展望に眼を向  
けたことは、疑いないことだ。そしてそれを主体の確立・精神  
の弁証法と名づけることも異論はないと思うが、ここにひとつ

の疑問がある。平家作者が、そのような主体の確立を行い、精  
神の弁証法によつて歴史の必然性を法則的認識にまでも、高め  
たにもかかわらず、作者の抽象的・觀念的次元における認識は、  
なぜお粗末なものとならなければならなかつたか。

平家の没落を単純に因果律で規定したり、清盛の悪行の結果  
とみたり、またそれは俊寛や成親、その他反平氏運動に立ち向  
つた死者の怨霊ときめつけたたり、更には神明仏陀から見離され  
たりしてしまつたからだとする作者の認識は、上の変革期の歴  
史的認識とは、ほとんど無關係に存在する。清盛の悪行も決し  
て悪のために悪がなされたのではなく、平氏政権と言う社会的  
歴史の基盤より必然的に生じた悪なのであり、平氏の没落もそ  
れは俊寛その他の怨霊によるものでなく、古代末期の貴族政権  
より中世の領主政権に移る過渡期に立つ六波羅のもつ政治体制  
の弱さの、しからしめるところであつたのである。この変革期  
の歴史の必然性の認識が、主体的に確立され、それが、精神の  
弁証法によつて到達されていたものなら、その歴史の必然性  
に対する客観化（具象化）は、どのような場合に於ても、作品  
にそつて過不足なく表現されていなければならず、単に平氏の  
悪行や、怨霊や、神明仏陀の背離と言う平家作者の抽象的觀念  
的認識の具象化であつてはならない。私がここで問題にしよう  
とするのは、まさにそのことであり重盛像を分析し、平家作者  
の姿勢をそれより汲み取ろうとするのも、実はそのことに外な  
らない。『平家』の重盛像の形象化が、単なる平家作者の抽象

的認識の具象化にしか過ぎぬことを『平家』は明瞭に物語っている。『平家』の作者が、中世の必然性の法則的認識にまで到達していながら、なぜ重盛の形象は文学的に不毛となり、作者の単なるメガホン化に終始しなければならなかつたか。これが問題だ。

しかし現在の私の力では、右の疑問は手にあまる問題であり、私は重盛像を私なりに分析するより仕方がない。その分析を通じて、その疑問が少しでも解決されれば幸いだが。

## II

重盛の平家物語に於ける登場は、岩波本では具体的に「清水寺炎上」からである。重盛にふれた最初は、「吾身栄花」の冒頭に「吾身の栄花を極るのみならず、一門共に繁昌して嫡子重盛、内大臣の左大将」云々と、平氏一門の栄花の様を事務的に列挙したに始まるが、この重盛は父の清盛とは対蹠的に聖人君子風の優なる人であつた。實在の重盛がどの様な人物かは詳しくはわからないが、『愚管抄』には、重盛のことを「イミジク心ウルハシクテ」と述べ<sup>註④</sup>ていることから、平家作者の重盛像の造型は根も葉もないフィクションであつたのではない。清盛の平氏一門に対する存続をはかるための腐心と実行とが、次々と反平氏運動を呼び起し、平氏一門をさげすむ者が、出て来るが平重盛はこの蔑視はまぬがれたらしい。反平氏運動の頂点に位置する法皇ですら、「今に始ぬ事なれ共、内府が心の中こそ愧しけ

れ。あたをば恩を以て報ぜられたり。」と言ひ、他の連中はなおさら、「果報こそ目出たうて、大臣の大将にこそ至らぬ。容儀帯佩人に勝れ、才智才学さへ超たるべしやは。」と褒めるのも無理ならぬことであつた。實際、重盛はすぐれた人物だつたのであろうが、平氏一門の中でなぜ彼だけが、批難をまぬがれ、上も下もほめぬ人のないほどであつたのか。このあたりに実は『平家』の作者の意図がうかがえそうだ。以下物語にそつて考察を進めていきたい。

法皇の側近で日頃より寵愛をうけていた新大納言成親は、折から左大将の欠官を幸いとして、その地位を望む。この左大将の後任には、徳大寺の実定が適任視されていたが、そのほかに、その地位を望んだ人はいた。

ところが、成親のさまざまの祈願空しく、左大将は重盛、右大将は宗盛と平家一門でしめられてしまう。この事実を知つた成親は、次のように言う。「徳大寺、花山院に越えられたらむは、いかゞせん。平家の次男に、越えらるゝこそ安からね。……」。

この平家の次男とは勿論重盛の弟宗盛である。成親の所望が右大将でなく、左大将であつたから口惜しがるなら、その所望の地位を奪つた重盛にそのほこ先を向ければよいのに、それをせずに次男の宗盛の右大将就任を口惜しがつたのは、興味あることである。

これは成親の妹を重盛が娶り、また重盛の嫡子維盛が成親の

娘を娶つていふと云う血縁關係から、重盛攻撃をさし控えたのだと解釈出来そうだが、この真相は、重盛が「容儀帯佩人に勝れ、才智才学さへ世に超たるべしやは。」と言われるほどの人物であつたから、その成親の批難は当らなかつたとする方が、穩当ではあるまいか。とにかく重盛は犯し難い完璧な人物であつた。反平氏運動の最初の謀反である鹿谷事件は、院の側近の間で計画され実行にうつされる。法皇もこれに参画するが、謀反に組した者の一人、多田藏人行綱の裏切りによつて、発覚した一味の徹底的な処罰が行われる。『平家物語』では、ほとんど清盛一人が、敢然としてその謀反に対処している。平家は政治的には、古代的政權であつたが、道長などのそれとは異り、軍事的な勢力を背景としたものであつた。この清盛の謀反人処罰の命令に、宗盛以下一門の人々、その他の武士が雲霞のごとくに集つた。『平家物語』では其夜のうちに、西八条の清盛の邸には、六、七千騎の兵士が集つたと記述している。平家の嫡子、重盛は事件が一段落してからやつて来た。それも重盛の嫡子、維盛、衛府四、五人、隨身二、三人と言ういで立ちである。武士は一人もつれていず「殊に大様げ」であつた。貞能が「なご是程の御大事に、軍兵をば一人も召具せられ候はぬぞ。」と言うと、「大事とは天下の大事をこそいへ、私事を大事と云様やある。」といましめている。

重盛の大事は、平氏の大事をさすのではなく、朝家の大事をさすのだ。自分が平氏一門の嫡子でありながら、平氏の危機に

対して感ぜず、大様に振舞ひ泰然自若としてゐるのは、よくよく重盛は冷静で朝家中心主義でこり固まつた人物に相違ない。このことは後にゆくほど明瞭になる。清盛の前で言う彼の小教訓も、教訓と言ふ言葉にふさわしいものだが、彼の思想的立場がどこにあるか明瞭に披歴されている。

刑の疑しきをば軽んぜよ。功の疑しきをば重んぜよ。世の爲君の爲、家の爲の事を以て申候。

積善家必餘慶あり積惡門には必餘殃とまるとこそ承れ。

この右にあげた言葉でなにか感じないだろうか。彼は清盛に對して普遍的一般的原理を以て対決しようとする。対決しようとする、と言ふことは大切である。重盛は本質に於て対決していない。対立し対決する位置に彼等はいない。そしてこの普遍的な原理は時間空間を越えて存在する論理であり、中世変革期の清盛と言ふ軍事的独裁者によつて築かれたこの平氏政權の基盤の上に見合つた形で即応された意見ではない。つまりこの重盛の言葉は、清盛の急をつける危機に對処するに、なにも有効に作用していない。重盛は天皇や法皇の權威を絶対化しているため、非のすべてを清盛におしつける。

猥しく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背き候ひなんす。

日本は是神國也。神は非礼を受給はず。

然れば君思召立ところ、道理半無に非ず。

人倫の道を絶対化しようとする精神が、現実やまた清盛の悪

行の然らしむるところの根本を見抜く目をくもらせる人間重盛を造型させる。清盛と重盛とのこの関係は、この様な具体者と超越的理論に達した理想人との関係であるから、対立出来るまでには至っていない。人間が対立的関係におかれる場合、相手が相互に価値に於て同一でなければならぬと思う。神仏の様な重盛（このことはあとで詳しくふれる）と、きわめて我執の強い一門の繁栄を極端に願う清盛では、真の意味での対立にならない。彼等の存在する次元が違ふからだ。

清盛がいかに平氏一門の繁昌と栄華に腐心し努力したかは、『平家物語』ではちよつと注意して読めば至るところに看取される。

さきの多田蔵人行綱の裏切り行為の告白に、「入道大に驚き大声をもて、侍共よびのゝしり給ふ事聞もおびたゞし。」と狼狽した様や、「教訓状」で「太政入道は、か様に人々数多縛め置ても、猶心行ずや思はれけん。」とあつて、彼が武装するのも、反平氏運動による平氏一門の崩壊を恐れてのことであつた。『源平盛衰記』では、重盛の教訓の後で清盛自身「淨海年關て餘命幾なし、唯子々孫々末の代までも安穩にやと存する計也。」と言つていることから、上のことを如実に物語つている。清盛が自己の一門の繁栄と栄華とに腐心し努力することが、かえつて反平氏運動を招き、反清盛反平氏の集団や組織を強める役目を果たことになるのだが、清盛の悪行は、単なる悪から起つたのではない。平氏の強大な勢力も本質的には、古代的組織に

のりかかつたものであり、頼朝などの領主体制と本質的に區別されるべきであり、平氏の政権は京都に存したために、なおこの周囲の外的な權威と圧力とに対処しなければならず、しかも院や天皇や摂政と言う伝統的權威をもたなかつたために、平氏はその政治的不安にいつも襲われ勝ちだつた。清盛はこの古代的な体制を維持してゆくことによつてのみ、自己の地位を存続することが出来たから、清盛のあくまでも自己の地位と一門の地位と安定のために腐心したことが、かえつて多くの反平氏運動を招来することになつたのである。従つて彼等平氏の存続と維持のためには、平氏に敵対する者には徹底的に対処しなければならなかつた。彼清盛の横紙破りの行為も、結局はその社会的歴史的關係から必然的に起つて来るものであつた。『平家』の作者は、表面的現実にあまりとらわれたために、彼の社会的歴史的な立場からの清盛の行為には気付かなかつたのであろう。抽象的にも、と言うより観念的にも気付いているとは思へぬ。

そうでなければ重盛を史実をゆがめてまでも、作者の觀念に従つて造型し清盛と比較させていくことで、清盛の悪人振りを暴露すると言う対照的手法はとらなかつたにちがいない。

さて、重盛の教訓で一応新大納言成親の死罪を思いとどまつたものの、まだ不安は消えぬ清盛は、法皇を鳥羽に御幸させようとする。このことも重盛は知ることとなり、やはり前と同様に烏帽子、直衣子姿で来る。この重盛は内には「五戒を保て慈悲を先とし」、外には「五常を乱らず、礼儀を正しうし給ふ人」

であるから、清盛もさすが親ながらも恥しく思つてゐる。ここでの教訓が「教訓状」であり「烽火之沙汰」である。清盛の法皇御幸の話聞いた時、重盛は涙ながらにその非を説き、平家の運も末になつたと言う。この世の中で朝恩の一番かたじけないこと、日本は神国だから神は非礼をお受けにならぬ故に、法皇の言われることは道理なかなことはない。中でもこの一門は四海の逆賊を鎮圧することは、無雙の忠であるが其實に誇ることは傍若無人であること、君のためにはいよいよ奉公をつくし、民のためにはますます哀憐をたれよと説諭する。君と臣とを比較すれば、君の方が道理であるから、法皇側を守護すると言う。そこで有名な次の言葉となる。

悲哉、君の御為に奉公の忠を致んとすれば、迷廬八万の頂より猶高き父の恩忽に忘れんとす。痛哉、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御為に已に不忠の逆臣と成ぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも弁へ難し。

重盛はここで彼自身の内的矛盾を告白する。忠君と孝行のいづれの道につこうかと言う悩みなのだ。そしてこの内心の矛盾は重盛が、熊野に参詣し自分の運命を占つた時に、彼が「勳に列して、世に浮沈せん事、敢て良臣孝子の法に非ず。」云々と祈念した言葉と同一の趣意をもつ。彼がこの「良臣孝子の法」に迷うのも、忠君と孝子の二者択一の選択に迫られて嘆くのも、結局は清盛の横暴と言う現実的基盤より発しているものだが、この重盛の悩み、すなわち悩みの両側面がすべて儒教的モラル

であることなのだ。重盛は悩みの中に於てすらこの儒教的モラルを忘れなかつたらしい。

『平家物語』には多数の人物が登場するが、その人物はほぼ二つの類型にわけて考えられる。その一つは義経や義仲や清盛などの様な人物で、彼等は歴史の現実を積極的に生きてゆく人間である。彼等は、最後は没落する<sup>註⑤</sup>と言うことはわかつていても、その運命の悲惨さを行為することでのり越えようとする。ところが、もう一つの人物像は前者と対照的に自己の運命の末を自覚し、世をはかなくて出家するか、または積極的に活動せぬ消極的の人間像である。この人物の二大類型のうち後者には、この重盛や維盛や高倉天皇や、その他の女性群像がある。文学的形象の問題として、この二大類型のうち、前者の方がよりすぐれている。『平家』は所詮、行動の文学であり、人間の行動を通して、心情の叙述を行い、諸人物のリアルな映像を展開してゆく文学なのだ。その点で、『平家』は『今昔物語集』以来の行動をめぐる野性の生々しさを最も正統に継承したと言える。

ところでこの後者の面、すなわち消極的の人間像に於ては、積極的の人間像と比較して、文学的形象の面で乏しいのは、彼等消極的の人間像が、積極的に行動せぬばかりでない。例えば、『平家』と同時代の鴨長明の『方丈記』ではどうだろうか。『方丈記』の作者、長明は現実の世界に背を向けた隱遁者であつた。行動に於ては彼等は重盛や維盛以下である。しかしなぜ行動文

学でない『方丈記』がわれわれに深く訴えるものをもつのだろうか。

これを『平家』の重盛と関連させて論じてみると、その解決はかなり鮮明になる。

『方丈記』の作者は、周知のごとく鴨社の禰宜の家に生まれ、和歌と管絃の道に親しみ、和歌所の寄人となつてゐる。彼は確かに貴族の文化圏内に成長した人間であつた。この鴨長明は社寺の地位を望んだが、それがかなわずに出家してしまうのである。ここで始めて彼は狭い貴族の世界より自己の厳しい現実

に批判的に目を向ける様になる。それがあの自己追及の論理を展開させていつた『方丈記』を生む契機を形作つていくのだが、『方丈記』の作者は、とにかく社寺の地位を所望すると言う現実的世俗的執着心を強くもつてゐた。きわめて世俗的な欲望であつたが、それだけに人間的だつたと言える。出家してからの彼の生活は、平安を極めたものであつたらうか。彼は性格的には確執の人であつたらしく、<sup>註⑥</sup>そのことは勿論出家したからと言つてなおるものではなかつた。彼は一旦捨てたはずの現実世界や自然の世界に執着し、出家してもその貴族的執着は去らず、……北によせて、障子をへだて、阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかけ、まへに法花経をおけり。東のきはにわらびのほどもをしきて、よるのゆかとす。西南に竹のつりたなをかまへて、くろきかはご三合をおけり。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物をいれたり。かたはらに琴琵琶お

の／＼一張をたつ。<sup>註⑦</sup>

と言う貴族的生活圏内に属するものを捨て切れずにいる。このことは自然世界に対しても、また同様であつた。この確執の長明が仏の教えに従つて「事にふれて執心なかれ」を実行しようとしたことが、彼の出家の生活の破綻を来すことになる。彼は現実としての醜悪なる自己と、理想としての仏の教えの矛盾にゆき悩む。『方丈記』が、「現下の自己を『汝』と客体化して呼んでゐるような次元の深いもうひとつの自己を発見してい<sup>註⑧</sup>る。」と言われるのも、つまりはこの理想と現実との自己矛盾のゆきついた結果であつた。同じ矛盾に煩悶する場合でも、『方丈記』と『平家』の重盛の場合との煩悶は、次元が異なるのだ。『方丈記』の作者は理想の一方に現実の人間的な自己——それがいかに醜悪であり、執着心の深く強いものであつても——を有しているに反して、『平家』の重盛は現実の醜悪さとは無縁なところに自己をおいてゐる。重盛は神仏にまで高められた存在ゆえに、その人間的苦悩は結局儒教的モラルに終始しなければならなかつた。神々や仏達の苦悩は所詮人間に訴える力をもたぬ。理論的に訴えても、生命に生々しく訴えるところがない。文学的形象のまずさは、ここにも原因がある。

更にこの重盛の超越的性格は、彼が運命を予見する力を有していたことによつて倍加される。重盛の教訓や訴えにもかかわらず、清盛は成親を死罪に処し、成親の子息丹波の少将成経、平判官康頼、俊寛僧都の三人を鬼界が島に流すにいたる。この

ため俊寛は恨みをのんで当地で悶死する。治承三年五月十二日午刻の頃、京中に辻風が激しく吹いて人家が多く顛倒した。宮中で神祇官を召して占わせたところ、「今百日の中に、祿を奉ずる大臣の慎、別しては天下の大事、并に仏法王法共に傾きて、兵革相続すべし。」とのことであつた。平家の運命の末を深く懸念していた重盛は、熊野に参詣する。平家の運命の末を占つてみたところ、榮耀榮華も一期のみで、末長く続かないことが顯れた。祈念の最中に、燈籠の火の様なものが重盛の身体から出て、ぱつと消える様に失せたのも、子息の淨衣の衣が喪服の様に見たのも、その具体的な顯れであつた。彼はまた同じ頃に靈夢を見ている。どことも知らぬ浜路を歩いていると、道の傍に鳥居があつた。その鳥居は春日大明神の鳥居で、人多く群集している中に法師がいて、一人の男の頭を指し上げていた。その頭は清盛の頭で「是は平家太政入道殿の御頭を悪行超過し給へるに依て、当社大明神の召取せ給て候。」と言うことであつた。こうして重盛は、一門の人々が得意の絶頂を極めていた時、既に平家の運の末を早くも悟つていたのであつた。このことは天性不思議な神秘的な性格を具えていた重盛に於てのみ可能であつた。『平家物語』もこのことにふれ、「天性此大臣は、不思議の人に、未来の事をも兼て悟給けるにや……」と言つており、重盛が靈夢を見た夜に自分と同じ夢を見た瀬尾太郎兼康に對して、「神にも通じたる者にてありけり……」と感していることから、重盛自身は一種の靈媒的性格を有していた。そう

言えばこの重盛のしげは「靈告・啓示・降臨・顯祀と觀念がつかぬが」つていらしく、重盛のモラリズム自身が、神話解説者の立場からする発想法だと言う興味深い指摘がある。

このことは今後の私の課題としてゆきたい。想像をたくましくすれば、重盛の熊野参詣の話も、更には春日大明神による靈夢も、それ等の教団や神人によつて語られたかも知れない。

このことは恐らく至当と思われる。『平家』が語りをもつていたこと、及び例えば俊寛の説話が有王と言う高野聖によつて語られたと言ふことからも、この推測は誤つていないと思われる。

重盛は清盛の悪行をいましめたが、無論そのことは平家の子孫を末長く繁昌させたためであつた。そして彼は悪行が結果として、災いをもたらすことも承知していた。

御栄花残る所なければ、思召す事在まじけれ共、子々孫々迄も繁昌こそあらまほしう候へ。父祖の善悪は、必子孫に及ぶと見えて候。積善家必余慶あり積悪門には必余殃とまるとこそ承れ。

ここには因果思想が明確に現われている。これが作者の思想であることは、明かであるが『平家』ではこの因果思想が、神明仏陀と結合するのだ。重盛の見た春日大明神による靈夢も、清盛の悪行超過が原因して首を取つたことを示すものであつた。このほか因果思想と神明仏陀の信仰との結びつきは『平家』では、いくらかも指摘できるほどだ。

修理畢て、清盛敵島へ参り、通夜せられたりける夢に、御



宝殿の内より、鬢結たる天童の出て、「是は大明神の御使なり。汝此剣を以て一天四海をしづめ、朝家の御まもりたるべし。」とて、銀の蛭巻したる小長刀を賜ると云夢を見て、覺て後見給へば、現に枕上にぞ立たりける。大明神御託宣有て、「汝知れりや忘れりや、或聖を以て言せし事は、但悪行有らば、子孫迄は叶ふまじきぞ。(大塔建立)

平家は福原の旧都に著て、大臣殿然るべき侍共老少数百人召て仰られけるは、「積善の余慶家に尽き、積悪の余殃身に及ぶ故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨られ参らせて……。

(福原落)

ところで重盛は熊野参詣をして、日頃の煩悶や懊悩の解決を自身で試みることを放棄して、神仏に身をゆだねようとする。このことは彼が天性不思議な神仏に通ずる人間であつたことから来る必然的な結果であつた。

親父入道相国の体を見るに悪逆無道にして、動すれば君を悩し奉る。重盛長子として、頻に諫をいたすと云へども、身不肖の間、彼以て服膺せず。(中略)此時に当て、重盛苟うも思へり。愨に列して、世に浮沈せん事、敢て良臣孝子の法に非ず。しかじ名を通れ身を退て、今生の名望を投捨て、来世の菩提を求んには。但凡夫薄地、是非に惑るが故に、猶志を恣にせず。南無権現金剛童子、願くは子孫榮絶えずして、仕て朝廷に交はるべくば、人道の悪心を和て、天下の安全を得しめ給へ。榮耀又一期を限り、後昆耻に及ぶべくば、重盛

が運命をつゞめて来世の苦輪を助け給へ。兩箇の求願、偏に冥助を仰ぐ。

熊野権現示現以後の彼は、たとえ抽象的にも、清盛の悪行をおしとどめる行動を一切とつていない。しかもこの神仏信仰が、彼の言動にいかにも力強く働いたかは、幾日も経ずになつた病を語る「医師問答」で明かだ。重盛は自分の病気を権現納受の顯れと思つて何等治療しなかつた。

権現既に御納受あるにこそとて、療治もしたまはず祈禱をも致されず

清盛が彼の病を心配して、宋朝より来日した名医に医療を加えてもらう様にと伝えにやつたが、言下にそれをしりぞけている。

彼は自分の病が定業であり、権現の納受によるものと悟つていたからである。彼はどこまでも神仏に忠実である。人間一生の最大の問題、死と言う事実に向面してすら彼はたじろがぬ。また、彼自身のモラルをどこまでも貫徹し得た。

若かの医術に依て存命せば、本朝の医道無に似たり。医術効驗なくんば、面謁所詮なし。就中本朝鼎臣の外相を以て、異朝淨遊の来客に見ん事、且は国の耻、且は道の陵遲也。縦重盛命は亡ずといふ共、争か国の恥を思ふ心を存ぜざらん。

此由を申せ。

『方丈記』の長明は、出家することで自己の周囲の現実を自己自身の問題として追及した。『平家』の重盛は神仏に身をゆ

だねること、現実追及を放棄した。

神仏信仰に関する説話は、中世では数多くみられそれがまた、民間信仰に結びついていることは、周知の事実だがその数多くの信仰説話が、文学的に見ていかに粗雑で拙劣であるかは、世の『お伽草子』や、その他の説話類にみられ枚挙にいとまがないほどだが、しかし勿論、中にはその様なものとは例外的に、文学としてすぐれた説話があることもまた事実である。西尾光一氏は『今昔物語集』の文学性について次の様にのべておられる。

『今昔』の本朝部を展望して、その仏教説話に文学化をもたらしたものは愛欲や殺生のような、宗教に対する矛盾の契機をふくむ人間性の断面の描写であることを考察したものであるが、そこでは仏教が文学をつまらなくしてしまうという作用の外側に、つまりそれをよけたところに、<sup>(註)</sup>『今昔』仏教説話を文学化し、おもしろくする契機がある。

ところが、これを『平家』の重盛と比較してみると、彼にはこの様な人間の現世的欲望に端を發した相剋は、見られないばかりか一切無縁である。彼が出家した動機が既に超越的儒教的モラルの相剋にあつたことはさきにものべた。

以上、われわれは重盛の話と、民間信仰的な要素が安易に無批判に結びつくことによつて、人間の力で現実を具体的に追及してゆく可能性が、うしなわれ人間の努力と營為を神仏が解体させてしまう結果を招来したことをみて来た。神仏と人間を

対置させ、その宗教的課題を鋭く追及するかわりに、人間の苦悩を神仏の加護や保護に身をゆだねてしまつたために、人間の努力と營為は問題視されなくなり、日常的人間の具体的活動が、否定されてゆくのを見て来た。

このことは、人間性の否定や拒否に結びつくものだ。重盛の文学的不毛はこのことに関連している。『平家』では、滅びてゆく者に対する宗教的救済が、作者によつてなされるが、このことは言われるごとく作者の平家没落者に対する同情の現われと見做しても、そのことによつて現実をいかに生くべきかと言う問題の追及と、明日への考察が失なわれてしまつたものとならなかつたかどうか、改めて考え直すべきだろう。

重盛の文学性の不毛さは、上の分析より苦勞なくひき出せるはずである。

(一)、重盛自身の超越的性格。

(二)、彼の苦悩が儒教的モラルの相剋と言う現実を飛躍した理論的苦悩であり、人間的執執に端を發したものではなかつたこと。

(三)、上の超越的性格と関連して神秘的な性格。このことは民間信仰の安易な取り入れによる。

(四)、作者の理想とする王法仏法の体现者としての人物像の素像にめぐまれなかつたこと。

右の(一)、(二)は作者の儒教的人倫思想によるものだし、(三)はさきにものべたように、民間信仰の安易な撰取による。(四)につい

ては、谷宏氏の指摘による。

作者が理想として抱いているよき天皇の政治をまもるよき貴族は、かれの体験が及びうる十二世紀末の貴族社会にもはや完全に存在していなかったために、王法仏法の体現者としての重盛を具体的な形象として創りだすべき現実の手がかりをもつことができなかったことの、直接の結果であると思われる。<sup>註⑨</sup>

重盛の文学的形象の不毛化の原因は、以上に指摘して来たとおりだ。ひと口に言うと、重盛の形象の失敗は『平家』の作者が、重盛を単純に抽象化してしまい、具体的な歴史的な現実に対応せしめなかつたことによる。

### III

ところがこの重盛の形象の不毛化を以て、平家全体を論ずることは非常な誤りであり、平家のあるがままの高さと美しさと豊富さとを充分にみないことになる。そこで最後に鹿谷事件を更に詳しくみることによつて『平家』の作者の思想や、神仏信仰その他の観念的な意識形態を裏切つて『平家』が、いかに文学的形象のすぐれた達成にまで高まつていつたかを問題にした。平家作者は、他の説話の作者がよくやる様に、説話の終りにひとつの確認をする。つまり評語であるが、この評語が、実は『平家』の場合『平家』の構成や造型とわかちがたく結びついていることを忘れてはならない。鹿谷事件で発覚した成上り

者の院の近臣西光は、その弟や郎等と共に清盛によつて首をはねられるが、平家作者はそのことをのべた後で、次の評語で結んでいる。

是等は云甲斐なき者の秀て、いろふまじき事に綺ひ、あやまたぬ天台座主流罪に申行ひ、果報や尽にけん。山王・大師の神罰冥罰を立処に蒙て、斯る目に逢へりけり。(西光被斬)

このことは西光の悪人として悪行振り、その結果として果報がつきたことを示しており、しかもそれは神罰冥罰によるものとす。この因果応報の思想と、神明仏陀の背離による人間の運命の没落は『平家』の思想的骨格だと言ふことは、さきにも論じたがこの作者の思想的確信が、鹿谷事件に関係した西光や成親には、一向に通じなかつたことに『平家』の文学としての面白さがある。言葉を換えて言うなら西光や成親は、作者の抽象的認識の具体的実践者ではなかつた。とくにそれは成親の行動をみてみると面白い。成親は左大将の任官を望んで、いろいろ祈禱を始めた頃、男山の方から山鳩が三羽食い合つて死んだ。これを占なつたところ、「臣下のつつしみ」と出た。これは明かに成親の謹慎せんことを悟す神のお告げであつた。にもかかわらず「新大納言是に恐れをも致されず、昼は人目の滋ければ、夜な／＼歩行にて」賀茂の上の社へ七夜かよつた。七夜たつたある夜のことであつた。「宿所に下向して、苦しさに、うちふし、ちと目睡給へる夢に、賀茂の上へ参りたると思しく、御宝殿の御戸推開き、ゆゆしくけだかげなる御声にて、

桜花賀茂の川かぜうらむなよ、散るをばえこそとゞめざり  
けれ。」

と示現があつた。成親はこれにも恐れず依然として祈禱をさせる。一体この神のお告げや霊夢や、山鳩が食い合つたりするとは何を意味するのか。

それは成親の将来に対する不吉な予告であることは言うまでもない。このことは明かに作者の虚構である。作者の考えはこうだ。

父の卿は中納言までこそ至られしか。その末子にて、位正二位、官大納言にあがり、大國あまた給はて、子息所従朝恩に誇れり。何の不足に、かゝる心つかれけん。是偏に天魔の所為とぞ見えし。(鹿谷)

中庸穩健な考えに立つ作者にとつてこの成親の態度は正気の沙汰ではなく、狂気の沙汰でそれは天魔の所為なのである。ここで成親の過分の振舞いと天魔にみいられた行為は当然作者の因果思想から減びを、予定されることになる。この神の告示によつて、成親がその過分な行為をやめれば、それは重盛と同じコースを歩むことになるのだが、成親は重盛に比較してあまりに、我執が強く現世的な欲望が強かつた。ために彼は「外人もなき所に兵具をとゝのへ、軍兵を語りひおき、其営みの外は他事なし。」と言われるほどであつた。不吉な運命の予感を知つてか知らずか、成親はとにかく自己の欲望をあくまで貫徹しようとする。鹿谷の謀反発覚後、成親は当然所罰されるが、この

成親は我執の強い人間の癖に、小心な臆病者で死罪を免れるために、清盛や重盛の前で自分の無罪を弁護する。清盛の追及に對して「全くさること候はず。人の讒言にてぞ候らむ。能々御尋候へ。」と言ひ、重盛の前でも、「何事にて候やらん。かゝる目にあひ候。」と言つて、謀反の自分に責任のないことをごまかそうとしている。このことは明かに成親の不当なせらとぼけと自分の罪を押し隠そうとすることによることは、『平家』を読めば明瞭だ。清盛に捕縛されて一間に押し籠められた時、彼自身謀反について述懐している。

新大納言は一間なる所に押籠られ、汗水に成りつゝあはれ  
是は日比の有まし事の洩聞えけるにこそ。誰漏しつらん。

(小教廳)

成親は院の寵愛によつて権勢をふるひ、脚光をあびていた當時の成り上り者であつた。

成り上り者と言う点では、西光などと軌を一にする。しかし西光の清盛の前で堂々と自分の謀反に組していたことを論ずるに對して、謀反の証拠が上がつているのに、自分の罪をひた隠しにして命乞いをし、あさましくも生きようとする。権勢のある時は、おごり高ぶり一旦、権勢が地に落ちると哀れにもわからにでもすがつて生きようとする姿は、西光とは対照的に、當時の成上り貴族の典型を意味しないだろうか。我欲の強い、自己の社会的地位獲得のためには、神仏にも無関心な男が、自分よりも強力な圧倒的な立場にいる人間のいることを知ると、

何と哀れなぶざまなずるい臆病者に成り下がつてしまふのであろうか。『平家』はこう言つた成親の有様を苛責なきまでに追及している。こう言つた成親の登場し活動する世界は、因果思想も儒教倫理も諸行無常等一切の、抽象世界は影をひそめる。

我執に端を發した人間の根源的欲望に基く彼の行為は、醜いままに『平家』の作者の狭い意識の世界観をのり越えて、広々とした人間の行動圏内まで参入するだけの力をもつて、迫つて来る。この様な世界こそ『平家物語』のすぐれたリアリズムを形成し『平家』をして、すぐれた文学作品たらしめるところのものなのだ。『平家物語』の文学的優秀さは、このように作者の意識的抽象的世界をつき破つて行動する人間の根源的な行動(勿論それは社会的歴史的に規定される)にある。『平家』では理論や抽象的認識よりも、具体的現実的行動がより優位な文学性を獲得する。これは鹿谷事件の成親や西光などについてばかりでない。義仲や清盛また、源氏と平氏の合戦部分の描写などは、すべてそのことが言えそうである。

以上、わたくしは重盛や鹿谷事件を中心に、『平家物語』をみて来たが、このことによつて平家の全貌が明かになつたとは思つていないし、また(Ⅰ)にのべた問題の解決にもなつていないと思う。しかしこれを機会に『平家物語』を更に深く掘り下げつもりである。

註① このことは、勿論『徒然草』二百二十六段の記述による。『平家』の作者をめぐつての考究は、さまざまな方面から研究されているが、

原平家の作者が行長であろうことは、今日では定説化している。

②・③ とともに、『文学』(一九六二年八月号)による。

④ 岩波文庫本による。

⑤ 清盛は積極的人間だが、没落はしない。平家の運命が没落するのは、清盛の死後である。この点、義経・義仲などにくらべて例外である。

⑥ 永積安明氏「方丈記序論」(『中世文学論』所収)

⑦ 岩波文庫本による。

⑧ 西尾実氏「作品としての方丈記研究」(『中世的なものとその展開』所収)

⑨ ⑩とともに、中塩清臣氏「『平家物語』の伝承構造」(『中世文学』と民俗)弘文堂、所収)

⑪ 柳田国男氏「有王と俊寛僧都」

⑫ この重盛のことばにくらべて、清盛の遺言はなんと文学に価するか。

われ保元平治より以来、度々の朝敵を平げ、勳賞身に余り、忝くも帝祖太政大臣に至り、榮花子孫に及ぶ。今生の望、一事も残る所なし。但し思置く事とは、伊豆国の流人前右兵衛佐頼朝が頭を見ざりつること安からね。我如何にも成なん後は堂塔をも立て孝養をすべからず、やがて討手を遺し、頼朝が頭を刎て、我墓の前にかくべし。其で孝養にて有んずる。(入道死去)

⑬ 西尾光一氏「今昔物語集」本朝仏法部における文学のあり方」(『中世説話文学論』所収)

⑭ 谷宏氏「平家物語」(三)書房)